

第十章 ノモンハン事件

第一節 出 動

ノモンハン事件

昭和十四年二月初旬ごろ滿ソ西部國境において頻々たるソ聯兵の越境が行はれ、彼が何事かを企圖しあるかに察知されるに到つた。

支那ではこの年の春、蔣介石が四月攻勢を號して螻蟻の斧をふるひ、その悉くが脆くもやぶれ去つたが、恰もこれと呼應するか如く五月十一日、外蒙赤軍に屬する一部隊がノモンハン附近で越境し來り、國境警備の任にある皇軍並びに滿洲國軍と衝突、激戦を交へた。

日滿兩軍は寡兵よくこれを國外に撃退したが、ついで六月十五日、外蒙軍は再びハルハ河の線を襲ひ來り、こゝに第二次ノモンハン事件が惹起され、軍は七月二日を以て斷乎ハルハ地區の敵に總攻撃を開始しこれを壓倒した。

軍の總攻撃により一時鳴りをしづめたかに見えた敵は、八月二十七日にいたりまたハルハ地區から大舉越境し來り、わが軍との間に三度び目の激戦が展開された。

この三次にわたる戦鬪がノモンハン事件の全貌であつた。この間敵は老犬なる機甲兵力を以て我を襲ひ、我は肉弾を以てこれにあたる血戦が、ホロンバイルの草原を紅にそめて展開され、地上に於て敵戦車四百餘臺撃破、また空中戦に於て我が荒鷲は、ポイル湖上の戦鬪、タムスク爆撃と敵を銀翼の下に俯伏せしめ、一千餘機撃墜の驚異的な戦果をあげた。

部隊は八月二十六日第三次ノモンハン事件のために出動、西部國境に蛟城健兒の名を轟かせたのである。

○ ○ 下 令

昭和十四年八月二十六日八時五分、ノモンハン出動のための○○○兵が下令された。恰度この日は部隊通信班の第一次檢閲が練武森において行はれる豫定であつたので、部隊長以下部隊幹部は早朝から檢閲地に出張中だつた。○團司令部よりこの旨を電話で受領した部隊本部では、直ちに各隊に傳達すると共に諸準備に着手した。

第○○團命令

八月二十六日
下 城 千

一、○團へ直チニ出動ヲ準備セントス

二、各部隊ハ既定ノ計畫ニ基キ速カニ出動ヲ準備スヘシ、携行シ得ザル荷物ハ殘留人員ニ保管セシメ○團主力ノ出發後成ルヘク速カニ原駐地ニ還送スヘシ

部隊の目指す出動地は廣漠たるホロンバイルの大曠原、しかも敵は自他に許す赤色の侵略者、科學裝備を誇る極東赤軍矣。

右の命令と同時に○團軍醫部より特殊地域における防疫、化學戰における各種防疫に關する諸指示が達せられた。かくて部隊は片山支隊の編成に入り○團長並びに支隊長から左の如き訓示があつた。

訓 示

茲ニ急遽東北健兒ノ精銳ヲ率キ勇躍出動セントス本職欣快措ク能ハサルト共ニ深ク期スルトコロアリ、惟フニ敵ソ聯邦ノ積年ニ亘ル暴戾ハ天人共ニ許ササルトコロ殊ニ近時滿蒙國境ニ於テハ我疆ヲ侵犯シ皇軍及滿軍屢々之ヲ撃攘シツ、アルモ尙其不法ヲ改メス之ヲ徹底的ニ膺懲シ東亞永遠ノ平和ヲ確立スルハ日滿兩國民齊シク待望スルヤ切ナリ

0512

今ヤ正ニ此聖戰ニ赴カントス諸士ハ君國ニ報スル千載一遇ノ好機ニ際會シ男子ノ本懐武人ノ光榮夫レ何モノカ之ニ如カ

敵ノ軍並ニ外蒙軍ハ其兵數ノ衆多ト物質的威カトヲ恃ムト雖モ精銳ナル皇軍ノ精神威カハ遙ニ彼ヲ凌駕シ常ニ彼ヲ屈服セシメアルハ諸士ノ既ニ熟知スルトコロ、殊ニ精銳無比ヲ矜ル傳統ヲ有シ且平素猛訓練ニ精進セシ我〇團ハ彼我兵數ノ如何ヲ問ハス必勝期シテ待ツヘシ

特ニ緒戰ノ成果ハ爾後ノ作戰ニ影響スルヤ極メテ大ナルニ鑑ミ細心ニシテ放膽敵ノ弱點ヲ突キ以テ最大ノ戰果ヲ獲得スル爲渾身ノ努力ヲ傾注スルヲ要ス

諸士宜シク必勝ノ信念ヲ愈々強クシ生死ヲ超越シ旺盛ナル責任觀念ト剛健ナル意志トヲ堅持シ斃レテ後尙已マサルノ概ヲ以テ一意其任務ノ遂行ニ奮進シ以テ〇團ノ名譽ヲ愈々發揚シ上

聖旨ニ副ヒ奉リ下日滿國民ノ負託ニ添ハンコトヲ期スヘシ

時將ニ秋冷ヲ加ヘ氣候ノ激變アル不毛ノ曠野ニ臨マントス各自特ニ衛生ニ注意シ遺憾ナク其本分ヲ盡シ且武運ノ隆盛ヲランコトヲ祈ル

昭和十四年八月二十六日

第〇〇團長 安 井 藤 次

訓 示

本職今度隸下部隊及配屬部隊ヲ指揮シ西方滿蒙國境戰場ニ赴カントス誠ニ光榮ノ至ニ堪ヘス諸子亦武人トシテ本懐コレニ過サル可シ想フニ諸子ハ

聖諭ヲ奉體シ平素訓練セラレタル處ヲ而モ我長所ヲ發揮シテ彼ノ長所ヲ封止シ又彼ノ短所ニ乘シ益々志氣ヲ振起シ體力ノ

第十卷 ノモンハン事件

二二九

0513

強化ヲ圖リ以テ我傳統ノ名譽先人ノ武勳ヲ繼承擴充センコトヲ望ム

右訓示ス

昭和十四年八月二十六日

片山支隊長 片山省太郎

片山支隊編成

支隊長 陸軍少將 片山省太郎

〇〇第十五〇團 (FA/so. 缺)

〇〇兵第二〇隊第二天隊

〇〇第二〇隊

〇團通信隊ノ一部

〇無線二小隊

〇〇兵第二〇隊自動車隊

衛生隊

十四時に到り早くも輸送命令が發せられ、部隊は二箇梯團となりハロンアルシヤンに向け列車輸送により進發する事になつた。

0514

〇〇第〇〇〇〇隊將校職員表

昭和十四年
八月二十六日

〇 隊本部							大隊本部	中隊長	小隊長
〇隊長 大佐 柏 徳 副官 大尉 齋藤 國松 旗手 少尉 武藤 武夫									
I							大隊本部	中隊長	小隊長
大隊長 少佐 田澤 啓三 副官 少尉 川久保 勇 軍醫 中尉 深川 太郎 同 同 山田 豊 副官 大隊長 少佐 長澤 太郎									
6	5	IBIA	IMG	3	2	1	中隊長	小隊長	
中尉 小宮 善吉	中尉 宮田 金吾		中尉 遠家 龜市	中尉 重原 慶司	中尉 森野 理吉	中尉 高野 諄平			
同 准尉 丸池 藤田 寛 祐太郎	同 准尉 近藤 林崎 宇國 勝平 武平	少尉 山口 新三	同 同 准尉 杉平 鈴木 久 真祐 賢 勇 作 司 信	同 准尉 内水 清山 貞 定 清 雄 治 治	同 准尉 前佐 川 藤 島 清 源 育 二 助 助 郎	同 准尉 加大 佐藤 平 藤 義 桂 守 佐 勝 吉 信			

第十章 ノモンハン事件

三三

0515

兵器掛瓦折掛 中尉 相澤 小壽 通信班長 准尉 志賀 周平 軍醫 少佐 廣池 文吉 獸醫 少尉 櫻井 宗己								
III					II			
大隊長 少佐 齋藤 俊三 副官 少尉 越村 藤吉 主計 中尉 中村 正夫 軍醫 少尉 渡邊 清秀					中尉 疊 徳重郎 主計 少尉 竹田 正義 軍醫 中尉 金谷 一彦			
RiA	IIIBiA	IIMG	II	10	9	IIBiA	IIMG	7
大尉 濱 久		中尉 宮澤 春正	大尉 瀧野 秀智	中尉 西野 清一郎	中尉 坪川 精作		中尉 佐藤 四郎	中尉 五十嵐 六平
准中尉 小田 林中 三 治七	准尉 恩 田 吉五郎	曹長 大石 藤一 淳由次郎 准尉 藤片 藤三郎 中尉 藤片 藤三郎	見尉 佐藤 多治郎 准尉 藤山 藤三郎 少尉 藤山 藤三郎	准尉 鈴木 長三郎 中尉 鈴木 長三郎 少尉 鈴木 長三郎	准尉 榊田 白澤 中尉 榊田 白澤 少尉 榊田 白澤	少尉 傳 田 鹿藏	曹長 關口 又三郎 准尉 關口 又三郎 少尉 關口 又三郎	准尉 池野 深内 見尉 池野 深内 中尉 池野 深内

0516

アルシヤンへ

第一次輸送部隊

輸送指揮官 柏 大 佐

○團司令部

部隊 (III・RIA・TIA・行李 缺)

第二次輸送部隊

輸送指揮官 齋 藤 少 佐

第三大隊・RIA・行李

北斗妖しくきらめく營庭に整列、北滿の秋はすでにふかいのだが、完全軍装の背囊は冬服の上からづつしりとかよつて汗ばむ位の陽氣だった。

第一次輸送部隊は同日二十四時、續いて第二次部隊は二十七日二時三十分穆稜驛を出發した。深夜の驛頭には勿論見送りの人を許さず、肅々たる出陣の風景だった。昭和十二年の山西出動の際とは全く事情が異つて居たのだ。敵が呼號する爆撃機は我々を輸送途上において何時襲ひ來ぬとも限らなかつた。各部隊とも對空監視を厳にし萬一の場合の手配を充分にとよのへてこれに對應したのである。

第一次輸送部隊は二十八日零時三十分哈爾濱着、同地において武藤少尉をして所要の連絡をなさしめて二時四十分同地を出發した。

列車は北滿の平原をひた走りに走る。二十九日九時、列車が東屏驛に差かかつた際だった。澄み渡つた秋空をきつて友

0517

軍機の六機編隊が我々の列車上空に飛來し、輸送掩護のため前後左右に哨空を続けた。わが航空部隊の驚異的な大戦果はすでに頻々と我々の耳にもはいつてゐた。青空に映える銀翼にみる目の丸の鮮かさに無敵荒鷲の頼母しさを沁みくゞと感じたことであつた。

これより先六時片作命第〇號が達せられた。ホルステン河左岸の戦況は益々緊迫した、ために各部隊はアルシヤン到着後二時間以内に同地を出發、二十四時間以内にハンダガイに集結せよとの事だつた。行程は少くとも六十軒以上と推定される。これを約一日の行程で突破するのだ。

十一時三十分列車は目的地アルシヤンに到着した。鐵道は此處が終點になつて兩側の山が行手を阻む様に迫つてゐる。左側は約二、三百米幅の平坦地がひらけ滿人部落が數十戸散在する。機關庫は敵の爆撃を受けて半ばくづれ、鐵骨が無残にたれ下つてゐる。大きな岩が處々露出する兩側の山には爆彈の跡がまるで地球の腫物の様にぼつかり／＼と數十箇無氣味な跡を残してゐた。

第二節 強行軍

歩 度 六 キ ロ

先に述べた如く、命ぜられた進發の時刻まで僅かに二時間の餘裕しかなかつたので、部隊本部は編成、命令の傳達と殆ど立つたまゝで萬端の手順を終へた。

残置を餘儀なくされた物件の監視のために荒川曹長を長とし各隊より兵一名を残して十三時過ぎ早くも尖兵が出發、ついで第一大隊が前衛となつて行軍が開始された。半岩石質の群山を縫つて名も知らぬ小川が流れる。滿洲にもこんな川が